



近世說美少年集  
 一編

一速 18  
 1579  
 7





4000  
2500  
1500

近世説美少年録第二輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第十二回

憂苦訴難く泣て帰帆を俟り  
繁華親易く漫遊遊を度とす

紹前齣復説宿六阿可加の初阿夏を福富の宿所へ汲引せしめられしを  
彼等が訪来る折毎に年来親うのりれる。阿夏の這男の送果不とく  
或の櫛笥硯管旅行の要の荷物と件の夫婦を取寄せられ宿六阿可加の  
受給ひて妻の風ゆき送んを用意する程宿六をの囑言する。猛風  
邪を冒されて次の日も臥せり。その故阿可加も阿夏母子の啓承を看喜  
正もゆるる本意ありとのまごえり。却説阿夏珠之女の川作景市は送  
られら相譚ひらぐ程久礼畑とい御まをさふけり。這人家盡処小最

1279

村田

美少年録第二輯卷之二

十角評書



寂寥る酒と飯とを賣る家ありて門の立居要背障子云々と記す既  
亭午ありり一々聊先の進み居阿夏の後者共侶の這齋前か立居後  
きく末ぬ珠之文と函箇の總角ホと招近つひのゆく袂を分えと齊一裡画  
進み入るも牀几小尻をうち掛れありと居る一箇の老人遽く迎へ阿  
客さる酒をやら召し飯を進めさるや。と問ふ阿夏をさる竹葉の勿論  
飯もたふん茶羹美何々をとり全れとさひは火鮎の泥鱒の濃汁獨活の酢  
甘如ゆといふ阿夏の領を吾併の泥鱒と好まごもあらん限り肴と平松  
前路と急ぐ旅氣竹葉も飯も這人數か合とさる頼むとさるふありの  
声ゆり立ち誰と来よか客の急せぬ火燵焼もやと呼れ妻あやんとて  
奥の下の出て来り且阿夏ホ子口誑と述べた思ひ茶羹折焼とや羹を  
烹めま程ありありさる酒を湯も折敷か肴と安排く且阿夏終が身

遠のて来り程ありて妻共侶の五前の飯を盛るべく誘ふと馳く羞  
ゆめけりも椀椀の垢染居色高盛の飯折敷の猫脚の相応一  
のまごころち笑み珠之文のちを蓋と汁の半椀澄く鏡小似り入居る  
其替り旅されも塩梅さお田舎備されと食餓れに要時措酒を喫  
飯をたぐく腹十分なりなるも此作景市の別を惜と立難く珠之  
文と相譚をも阿夏の急小推禁めく和子達のと還り家翁の俵りひ  
あんのこの丸作景市の息も嘆息と阿母か周防へ起れ何日又  
かり来まき日長くも厚二里の送らしてひひと阿夏の後あまきあつ  
りりり誠心えと飲者う侍れどもよや何処で別るとも送懐さるる  
るん宿六使の来まきかへさの心をめんと十五不足ぬ終角の路次長  
影護りよりや是首ゆく別るとも再會の日けさるあつと吾併と苦く免



のま。といふ珠之父も嘆嘆しく。母の遠慮實に以の凡公も景公も藤での  
 盟約を忘れず。今の別の惜む足らぬ送年長時と得へ全取ることを  
 こく還り受命とせられて領く凡作景市やうなるとの意小任けり。有然而阿  
 夏の昼餉の價を。あつた同く養を取らせ。訪とく齊一外お出。和子達  
 よ。忘れず。家公も真さる方ゆの送る傳語を京して。先にお  
 母小引を珠之父後者さふ口誼と舒て西を投て。雲水の世々晴れ春の  
 日も秋の夕れ心地せ。凡作と景市に姑く其処小立在。をを多ま。目送り  
 けり。然れれ母子の次の日小京師通く求まける。阿夏の心小あやう。舊里る  
 ぐら彼処の親類もる。友もあ。名所古跡を多くほし。花鳥の心  
 あ。藤のあか邁せん年歴おけれ。京師史を多れる人の多。あ。心小  
 立。恥のちし。所為る。と尋思。京へ入。直浪速小社

けり。あつたあれども昔春の旅の前路の穂て花盛。民の門傍も野を山も  
 眺。未違る。心其処小あ。田打。細輪の田井小。曉昏毎小  
 宿りも。三四日といふ程小。兼鼓。角組。浪速津の船長の宿小。著  
 一。緯云云と。生。便宜の出船を。索る。明後の比。周防へ。飯。船。あ  
 といふ。憑心。且。是。処。小。還。留。わ。叔。福。富。遣。使。飲。の。消。息。を。書。写。め  
 又陶瀬十郎小贈んと。此の土産を買とり。その目を。俟程。立  
 夙め。船を出。と。甲。夜。の。間。小。阿。夏。の。客。賃。を。亭。主。小。取。ら。し。水。行。の  
 足を。同。定。め。福。富。より。隸。ら。れ。て。の。所。を。送。來。る。後。者。を。勞。の。件。の。書。信。簡。を  
 未。女。給。小。けり。春。の。夜。も。果。敢。る。明。く。追。風。よ。と。罵。騷。舟。人。亦。小。志。さ  
 ま。阿。夏。の。珠。之。父。共。侶。小。と。三。板。小。ら。乗。と。を。弘。舸。小。赴。く。後。者。の  
 水。際。小。看。立。く。簾。子。を。遮。与。一。船。小。程。と。母。子。の。水。主。楫。取。亦。憑。心。む。と



まれと陸と水告別を浦風小吹かされて別れけ。然程小阿夏珠之友も  
乗る船の浪速とて幾日もあらず順風のいと早なる湿気さるも續  
たらず是首の港口彼首の漁村と歌船の三日来と歴つ。春過たて夏も  
たぬ。陸月の某の日小辛くして周防の山口小著にけり。長に水行の頭病せし  
母を子に又教へし再生の心地なり。船より出で程近た湊の町小休ひく。御  
導の為のいと人を備ひ鹿子と肩と大内家の城下なる鶴峯小赴たり。  
粟津屋祥八とう喚做する。客店の宿を授めて僅小疲労を慰めたる阿  
夏へその宵逆旅主人祥八を招かよせ。此の團主の社内人小陶瀬十郎とい  
刀袷あらんを宿所何処ぞと問へ。祥八眉を頻單めて不自然に人知らず  
ま大く云る。宿所は下といふ。阿夏も亦訝をそのそ云ふ。とある。あの亭主知  
らざといふとも巷小出く人小問ぬ。ぬの宿所のあれぞんや。疎と園る。と肚裏に

粟ののち推く。身の程軽た武士する人小知られぬ。ゆもあはぬ。團主の  
御内で二と争ふ。御侍の子息と情あはしく同定めく。ゆひは頼めども猶あ  
る。ゆひ生志とて退たり。却説阿夏。その次の日小巷より出で。彼此人小恋した  
人の宿所を問ふ。と云へ。起出朝より。心地猛小常る。ゆひ忽  
地眼眩さく。歩の運びのこれゆもあはぬ。ゆひの似ま臥て。ゆひとて已れたる  
ゆ珠之友を喚近づけ。けは風めく。ゆの叔父公を語んと。ゆひの猛小心地は病  
あて。一步も運へ。迂る。あは月来の舟行小揺れ。疲労小あは。ゆひを  
ゆの吾侪小代て。ゆの叔父公の宿所を索ひ。陶瀬十郎與房ゆと。ゆひを  
ゆ人毎も向て。定ふ。知ると。あは。卓午の特ま。暑め。ゆひを  
ゆの領く珠之友。ゆの趣あるゆゆ。茶さへて。俟め。ゆひを。身と起。ゆひの  
足の逸も。管の小笠を引提て。外面望て。ゆひの。夏の日消。ゆひの。親の心を



知らぬ子の。曉昏小少の来り母のよけも昇者ゆりし小降陌を隈まらち巡りく。  
 或人の門の立より路智く人を呼出せ云云と語れども陶瀬十郎といふ者も。  
 命知らざるとの答へり。と報る小阿夏起直りてを不審に思ふ今もその  
 名を更らね初如くるもとも陶氏の人をよむ日毎小外はゆ叔父  
 公の宿所の知るまで問ふその身の務めせよ親孝行のまゝと摠て你の為  
 るりや。と答へぬ。とせと教諭と送る日。一宵も千夜と安うしぬ身の病  
 著の瘡く。誰の留ねと籠の鳥啼泣く小弥ま。苦し小際る。是よの  
 後珠之次。毎々小街衢小出て神社佛閣小遊び。又あると田樂雜劇の  
 観場小立入りて餘念なき日。又小立重友小押さふ。是首の坊彼首の  
 市小遊戯敵のいので来小ければ。果の漸々小懈りて。瀬十郎が哀  
 ある人ゆの問むる小けり。阿夏といひ。阿夏といひ。奥房の所在を知らん

必心の且くも。已とるれば復栗津屋のあり。祥八もその家の奴婢小も陶瀬  
 十郎といふ。その宿所のいまだ知れず。守の御内小相識あり。同質して。時々  
 頼り甲斐も夏過るとその朶月の中瀬より。阿夏が病者良瘡り。起居自  
 由あり。小立立み。外小出。城ぐる人小近。情郎の存や亡や。同決ま。と  
 尋思。初て結髪する日。逆旅主人祥八が阿夏の身邊小来て。り。小  
 晝裏小屋。陶瀬十郎の事。便宜を討めて。最も定ふ。小  
 たり。その當館の權臣ゆ。御座。陶遠江守政房太人の嫡男。駿河守與  
 房ゆ。の。一件の刀袷。初名を津守と喚れ。今より十四五年前。比  
 一総上の。大内義興。あん伴ゆ。京師小陟。折障ること。あれ。約在京  
 四捨の程。通稱を改られて。瀬十郎と唱。とを。小彼ゆ。行。り。小  
 上の脚氣色。を。家。猛。の地。追返。され。無。電。と。大。約。百。日。を。小



去る御免を被りて御館に出仕あり有之程あり父遠州船政世を遊  
 正の御免を被りて家叔と美嗣と駿河守に任せられ奥の地を以て取  
 次郎の年ありけん男児生れぬひの房子丸と名つけり今茲に八才九才  
 十可の年ありぬる小和泉州左界の城に在り永正六年の春當館を久  
 菊池武俊征伐の忠賞として前將軍義植公より賜り加恩の地を以て  
 上野御在京年来を歴て永正十五年八月二日管領職を辭しぬる  
 城ありと阿波の三好時を以て動もされ左界の城を以て諸將を以て  
 守與房の左界の城の大將ありこれ軍兵二四千名を隸られて彼地を遣さ  
 六年巳卯の春のゆえに今にや四捨するの然るを以て彼のの京あて

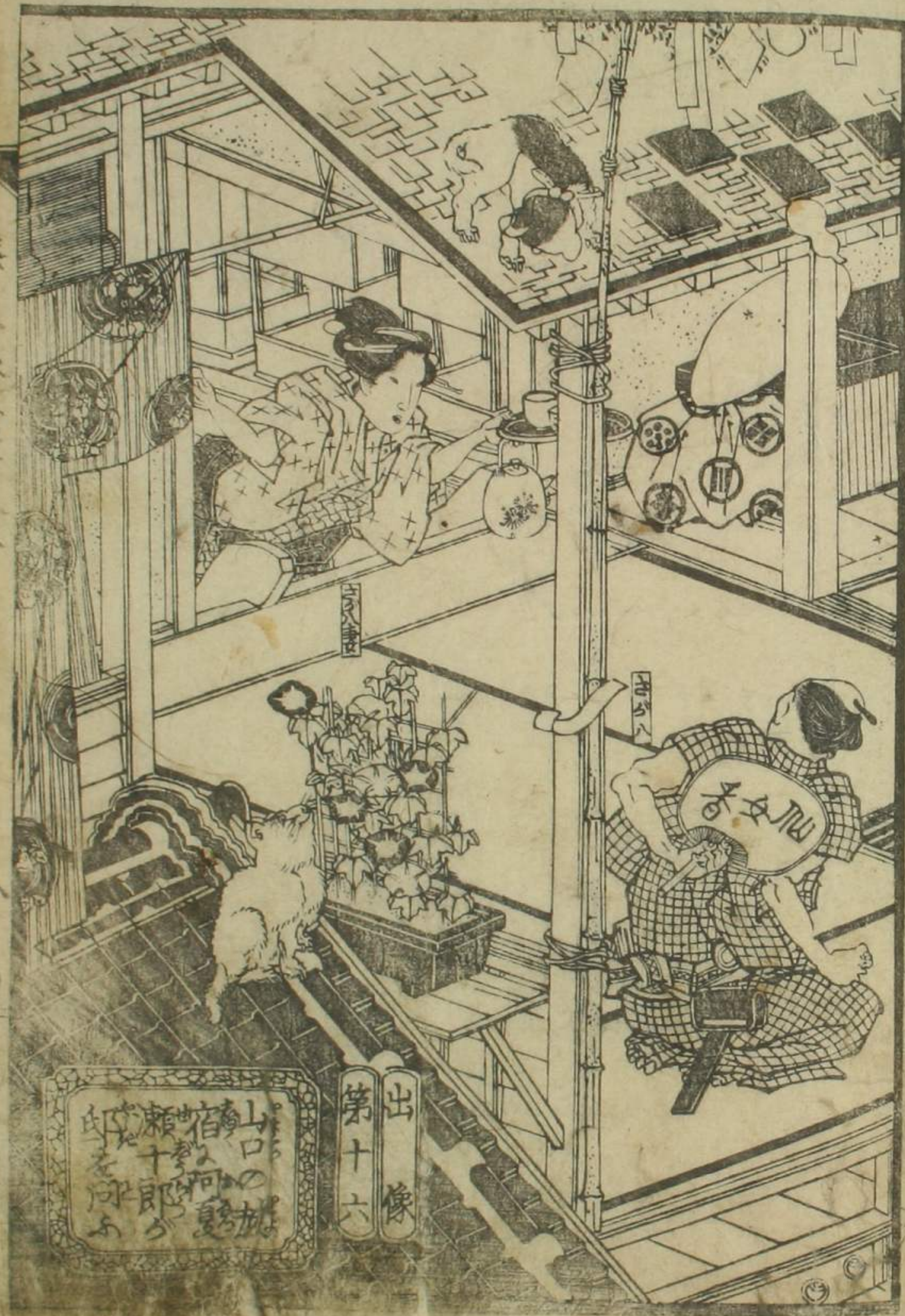
喚れぬ通稱の三竹覺と瀬十郎と云ひぬ人も我も知らぬ等閑  
 と云ひぬいと報ふ曾の塞りてあよ望を失ひ阿夏の雨時心もなせ  
 困り果て額を拍く沈吟し投りし縁由も知らぬ近江の盡処より  
 左界より来る甲斐もる飛禽の鶉の昔と齟齬入の往方の憾しや豫  
 せ目睡難し波枕安らざる胸のあり海と山口の宿も空る日來歴て  
 更められたる愚痴あり奈とて侍るる遇すは死陶の往方知れど  
 畏れ赴たはるべしと云ふを祥八推禁しめて修心するを以て報えり



あるふ敷を制めつぎのふとふ阿夏を膝を進めつぎ何處で侍るやとせりく  
 向れてあれがとよ今茲の京師も五畿内も波風且く静まて四民安堵の由ひを  
 るまふあへも注進のりけれ當の館聞食てあふん左思の交代の大將を  
 遣へ陶具房を召返し渠が年來の勤勞を慰め給ふに死めんと仰せられ  
 けのぬる月のふの件<sup>の</sup>交代の大將の既ふうちあひてを俺們的町人のふ  
 あれ然るん制度を知さうもあふりし皆是上の御内人の正しくせらるり  
 るれ違ふべもあふりしを修りて又さうは彼地へ赴たふとも亦甚錯を陶  
 大人の左思もさむるのひ<sup>の</sup>比の悔めらん大人の還らせぬ日の遅速の測り  
 ぬけれども這味とやと過ぎるの談ふひのふとと正首小説論を阿夏の  
 せり飲ひとを憑るふはり世塞翁が馬とせん今の敷の今の間は飲ひ  
 かりぬる母子のうを神仏の捨さるぬのるべ<sup>の</sup>情のの按さるは是の官言の

如く待の甘露の降る日もあふ左思を遭んり不定の猶も姑く遠留て厄會に  
 こそるべけれ就て陳もあれがあらぬがたの當の館と宣ふ日義の京師  
 御座る管領さぬのえまらんか家は例るとや重職を辞せぬてあ地  
 更のふひを以てあめつと向の祥八微笑て浮世の陳近江路の山里より  
 来する女中と受けかゝる疑ひの釋とて有つる一五十一説つる言長き  
 るまふれもけの聊暇の詳の生口は近曾京都の將軍家義植公とせ  
 一東山殿政のあ弟今出川殿親のあまらる東山殿養ひ立て將軍なるあ  
 ぬ二歳余るの管領政元ぬの逆意を伊豆の勝幢院政知卿の親の御二男  
 ける義澄公<sup>の</sup>通とて立て將軍なる進らせ前將軍義植公といも稠く推  
 籠て家臣物部某甲が宿所へ預置たり辛くも脱出せぬてその山口へ渡  
 御しく館と頼せぬの義貞卿の精悍く與復の軍談を疑へ姑く時を俟





出像  
第十六  
山崎の  
宿の  
十郎  
郎



美作金二車

一



のひよ永正四年夏陸月改元あり浴室にて家臣の殺されぬに因り京師の  
 静るも同謀者の報せせし當館義興御様大軍を催し義植公を  
 補佐し其の勢を京師の攻陞して戦ひ捷利を獲り然れ共將軍義隆公の  
 近江の岳山落さるるに三稔彼処は御座り音世を断りぬるの時を  
 義植公御本意を遂げられては將軍の拜任せられ故のて世を治め改元  
 のひよ比自是當館義興御様の大義大功傳りぬるもわかれ冠位二位の陞  
 さして管領ありぬるに抑京鎌倉の管領將軍家の御親族志波細川畠  
 山上杉の人々を成され置たりぬるに鎌倉の管領憲實は世を厭ひ入  
 道と當館館身富ゆ長門州深川大寧寺の御座りければ入道長  
 棟菴主館の御養父と稱す則執事職を受紹せし管領ありぬるに  
 より後條園爵の草本の效を憲實主より譲りて今書これを用ひぬる是より在京主

歴々當館の威威の肩に比るもの存れ志仁の兵乱以来公武等しく衰微と  
 物足さずもわかれ軍役の雜費之餘の支を館の賄ひぬるに財用竟に續  
 せし難義興及びぬるに加旃御領國内野の仕性々々を深し願ひ  
 とせぬの故に當館のゆる永正十五年秋八月初旬の管領職を辞しぬる  
 當所の還るぬるに是より京師のゆび乱れて畿内小戦ひ已とるに三好の貴殿尾  
 ちく主と主とせしり義植公の去歲春三月の下院京師と世を渡り  
 没落をぬけれ世の入るに彼公の嶋の將軍とすは先小義植公故將  
 軍義隆公のぬる子なり義晴君の養嗣と播磨を治りぬるに義晴公去  
 歳の陸月極上洛ありぬるに冬十二月廿五日將軍に任せられ室町の御所在  
 ませぬに年続お十一るに將軍の只名のまて世間のく穩るもとの風声此處  
 へもせえぬ若し乱世とすも當館の御武徳中山陽道に異るぬるに



多く民肥たれ。京師の乱れ。住不樂。公卿上達部の播紳家も。這山口の根  
 住。當丸館。小身。寓。又近。園。坊。賈。工。匠。各々。生活。の。便。者。を。求。め。く。  
 皆。あ。の。処。へ。來。集。り。市。中。小。軒。を。相。連。ね。て。屋。上。の。屋。を。加。え。港。口。の。來。帆。絶。る。日。も。  
 され。諸。國。の。名。物。輻。輳。して。自由。多。き。と。い。ふ。も。然。れ。世。の。人。の。地。を。稱。て。西。の。都。  
 と。喚。做。す。め。く。ま。で。愛。を。た。福。地。の。あ。る。れ。淡。々。の。人。の。珠。を。炊。死。桂。と。り。て。新。の。ま。り。も。  
 容易。多。く。死。の。ま。り。物。の。價。の。廉。く。唯。是。敏。華。の。沿。習。と。う。客。店。も。と。も。  
 とも。準。ど。死。の。母。子。の。日。毎。の。客。賃。も。銀。六。錢。目。給。と。貴。い。と。い。ふ。ひ。ひ。で。福。  
 室。の。とも。他。客。を。雜。へ。と。賃。際。の。せ。坐。席。料。の。勘。定。外。を。輸。く。の。駁。州。の。  
 陶。與。房。と。諮。の。由。縁。あ。り。の。ま。り。左。中。右。の。も。あ。り。く。這。地。の。杖。を。駐。め。る。人。  
 彼。大。人。の。先。祖。と。り。代。々。海。家。老。筋。の。威。勢。と。り。所。領。と。り。い。ふ。ま。り。い。ふ。ま。り。い。ふ。ま。り。舊。  
 家。の。鄙。語。の。も。り。の。ま。り。立。下。の。巨。樹。の。丹。陰。長。た。物。の。巻。れ。よ。と。い。ふ。ま。り。い。ふ。ま。り。い。ふ。ま。り。

長物。の。も。り。の。ま。り。時。を。移。す。の。ま。り。の。ま。り。何。々。と。も。阿。夏。の。俱。は。ら。ち。咲。く。  
 現。詳。る。物。語。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。定。め。知。ら。れ。て。日。來。は。眞。實。と。慰。め。け。り。既。に。推。  
 量。せ。る。如。く。陶。師。の。大。き。さ。及。舊。縁。の。は。ら。ち。彼。人。と。對。面。せ。て。求。め。  
 ぶ。とも。資。の。も。り。然。る。と。定。め。外。の。此。の。報。を。と。り。と。い。ふ。ま。り。祥。八。又。ち。阿。夏。  
 ひ。く。呼。び。て。吉。左。右。と。今。より。俱。に。俟。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。女。房。が。家。公。と。呼。子。  
 鳥。の。つ。つ。も。出。て。女。客。の。力。を。親。し。の。ま。り。の。ま。り。と。い。ふ。ま。り。似。て。と。い。ふ。ま。り。  
 疼。れ。腹。を。撈。ら。る。祥。八。と。い。ふ。ま。り。と。い。ふ。ま。り。と。い。ふ。ま。り。と。い。ふ。ま。り。然。程。の。  
 珠。之。の。目。の。ま。り。城。下。の。町。を。遊。び。く。黄。昏。の。ま。り。の。ま。り。阿。夏。を。俟。呼。近。つ。  
 けて。御。向。の。も。り。報。ら。れ。る。緯。の。趣。如。此。と。い。ふ。ま。り。と。い。ふ。ま。り。と。い。ふ。ま。り。と。い。ふ。ま。り。  
 の。ま。り。叔。父。の。遺。と。い。ふ。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。  
 言。上。夏。を。俟。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。



定めてん優ふ侍とせよと云ふ答をり大人と姑く親を尉めけり俵久死  
秋の宿のまふとくうけんと明くと掘月廿日あり比阿夏が懐ふあけける  
五両の金も用盡と絶ふ二三分残す現をの該もあらん阿夏原是歌妓  
ぬく世帯未熟の癖をれ銭使ふ心を用ひるは是の事あふて母子の客  
賃と一日の銀六文と定められ月首九十文の没文あり逗留既小二个月餘り七八  
十日あり今宵財囊を揮つて債をぬぐられと暮る福富村と辞し  
夫えと考ふ比大夫次が計ひて賭の金十両を分ち五両の珠之奴が唐層の纏り  
けれ尚頼りて真愛とも思ふ件金の竭比中陶氏の船若者ぬてあうんゆを  
資とて船纏の物を鉄くぐり豫て深念を考うけん阿夏をの宵珠之奴を  
傍に招き潜る珠の依りも旅宿久しかり吾侪ごとく来一五両の  
金の月来の客賃も竭る福富村の計ひて依り持しぬる金の事をも母に

わしは長々御苦勞々々との被てん出せ珠之奴ら騒々胸を鎮め  
喃母の搭棚へ今も腹小巻く舊の依りも金の使ふ此もなとの阿  
夏呆果る腹立ちの涙を噫大膽る彼金と依り用盡せと福富村の  
賜へお小宿と定め此と受取んと思ひとも吾侪ごとく女流を世憑り死  
合宿るれば賊難る角測已かり依り日々出ある宿も稀る福富  
殿の教を守り所要あるは依り上層の預置る不安と愚痴の思  
慮や悔やゆい何れ彼金と何れある隠る報よの事甚麻ふ思  
且珠之奴も目を撮赤めて母よと怒るもみづらあひぬる叔父の宿  
所を語よと出されより日毎る小京師も優ま無き地を見るよ暮  
るも走の巡りあり終る五十五子の幼鈔の湯の水も幾回も飲る茶價  
唇食是彼一分免其日南の氷忽地消て又一分二分三分の夢も果敢



る五両の金の使ひ方も傳ゆる志ごも。その大くも知れてあり人集はる所。人粒も亦多かれ叔父公の宿所を知りる人のありやせんと思はるる歌舞妓の木門小立よれば田舎見心と侮られて思ひけるをさう不意を取られ折もあり。神社佛閣も多し叔父公の所在と知らぬと念じて投る十二銅賽銭初穂も蘊す。二貫ののりありと鼻緒を踏ぬらと草履を買ひ日も多き足の爪を蹴放ちて賣茶店小憩一日もあり夕立の傘渡舟銭の没るの事あれ果をん身小叱られんと思ひけるも早晩不用盡と信りて疑ひあるとひつ懐するを入れ鮮出する空搭膊の口又輕紙布の目小漏るとええ左涙るるも有息弁並立りて以釋と阿夏の聽る声戦と嘻口功者小ひつとをひ譯するべし。款寔小銭鈔の没る事ありとも吾侪小隠と汝が隨意使す癖の済とある。いふまゝと敦圍て權の火箸合するも背と礮と打懲せ走りも退を泣

沈も母れよ免ぬる路費と用盡くも叔父公對面ある外もこの事をいふ。客賃の債もその折は賞ふりの易らんとその目もこれぬやある親一と子二人の身も痛く憎れて母小立甲斐のありぬれ覺期と究むる。南無阿彌陀仏と唱へも果だ側小措れ纏腰囊とみづら項へ巻被てと縊とほ程小阿夏の吐や。嗟と推林めと珠之短氣とまざるのありと幸ふと批取る財囊で目を押拭ひ目今休むのれ如く物之を妻妾時の程と叔父公の再會あるとんあ母子のうへ安らふべしや休は寝れる五両の金との依ありとも叔父公の資とあるや。豈二个月とも支んや其処は心のなから子と責むる行と愚知るる木行の程のなれやあれは宿之定め折件金の受取と吾侪の腰纏で措へる口古のうらんと後々も福富の誨固く守り船小契と劍と素も琴柱の膠まるらる諺も似くはるる然りととも錢鈔する。一日も送り巨は叔父



公小再會せん日まで吾侪が衣裳髪飾と沽却て所要充んぬれば其の  
趣之宿の夫婦知られざる懐見透されし。憑一氣多かりて其の言を  
あつらひて翌明後の比潛ち市よりゆきて佳の。あれも其の段のあつらひと其の  
示まを珠之女の波りまをく領て嬉や免あひまの賣物のりも是首の  
町中も彼首の市中も認来る人々も其の佳とも質も典る。其の首の隨意相計  
てんあつらひて家の内の奴婢中も知らるるゆゑあつらひて吾侪小任あひて潛め  
答る少年の良らぬ夏中を怜利る。あつらひて白の巾機も届く。示し合まは  
親心臥篋の行燈掻起しとも子もあつらひて陶師の帰帆の  
兆歎と母と子と心祝ひも夢の世や寝よとの鐘の御音比偲枕小就なけり。

第十三回  
無柳橋小容婦絃歌と賣る  
侯鯖樓小洛人舊妓と認は

却説阿夏はその次の日小櫛笄と好衣の旅の要る物とを篋中より取出  
あつらひて推包と誘とを珠之女の遞与けり。示合せしめれば珠之女のあつらひ  
竊小市よりあつらひて相譚済しけん。あつらひて隨小沽却て若干の銀を得れど  
そが偽銀と推掠めて皆飲食小使ひて親の價と詭てそ氣色も顯る。あつらひ  
阿夏は其の事も知らず。小後もあつらひて小要るる物を佳ると四五回小賣ひ  
其の件は篋の空しうりて。今も親も子も身小著る衣の外貯禄のあつらひ  
あつらひて陶師の資を心當小唯その帰帆を候程世の風声を知りて。日々珠之  
女を港只遣し又祥八も同る。あつらひて日を送れ紙窓撲つ風の音  
篋子の下より虫の音も朝も夕も膚寒秋も僅ふる。左界の便り言え  
後阿夏はあつらひて候とて又祥八も同る。あつらひて支敏彦人を呼んたさる  
あつらひて躊躇て在りける。あつらひて日も港口遣し。珠之女があつらひて忙しげ









武蔵野の戦

十五

千成



左界の落城  
子と全うせ

画像第十七

武蔵野の戦







祥八のむねごとく。有月町に慰めり。さうはく奥の退りけり。あれが阿夏。今さき身の  
 措処を定めり。涙の間にさきもあつた。さう久後を思惟る。未走るもの。必速く死する  
 人の交るころ。陶師ののりも生涯。昔本で歎くとも。その甲斐あふふを。されば絶  
 る。絶せざる。当然なる身の難義。既小盤纏の甥。され近江へは還りぬ。さうり。  
 然りとも。馴染もさき。その御。何ぞと世を度。さき身。さう。さう。火焼水  
 汲む奉。今くも。杖のさき。を救ふ。尚総角。珠之次。を推。つて。買。とる。と。も  
 今。あ。ふ。做。か。つ。り。又。集。の。商。賈。許。仕。く。小。斷。ふ。れ。と。い。と。も。保。人。の。あ。つ。つ。人。の  
 得。さ。さ。為。人。の。亦。心。の。と。る。彼。福。富。の。名。賣。さ。る。百。金。あ。も。る。の。ひ。た。五。色。代。玉。を。返  
 せ。ぬ。五。稔。と。の。長。月。旦。と。い。ひ。の。依。小。役。使。つ。て。孫。小。琴。之。教。を。奥。印。可。ま。を  
 取。り。せ。さ。ら。世。の。定。式。の。謝。儀。さ。る。と。さ。夢。の。も。あ。さ。も。せ。く。別。る。折。十。金。の。賤。を  
 ま。と。因。の。ま。く。賸。五。金。を。珠。之。次。が。賣。買。の。纏。う。た。り。な。れ。後。の。も。あ。つ。さ。う。た。り。耶

折玉の價をさき切。て百金贈られぬ。さう。時。も。心。つ。つ。と。も。あ。つ。も。ま。ま。さ。く。遭。て。恨。を  
 述。ん。ゆ。も。山。海。千。里。を。隔。る。旅。の。あ。れ。ば。阿。宅。言。さ。ら。天。孫。雁。の。侶。の。後。れ。山。の  
 猕猴の林。小離れ。真愛のも。ま。せ。親。子。の。性。方。を。定。め。難。る。も。彼。人。の。心。結。さ。り。小  
 よ。り。と。ま。あ。ら。ま。と。と。壯。子。向。ひ。腹。小。答。つ。身。の。幸。さ。る。人。を。怨。ま。の。愚。癡。亡。女。想  
 歸。り。よ。り。近。江。の。龍。勝。の。神。さ。る。と。會。私。勝。の。浮。世。の。人。情。腹。立。さ。う。と  
 哀。し。ゆ。衣。引。被。ぎ。臥。せ。り。且。く。と。珠。之。次。が。め。さ。び。り。さ。る。阿。夏。の。あ。つ。さ。う  
 頭。を。搥。て。枕。方。近。く。侍。ら。し。り。嚮。の。祥。公。の。さ。ら。左。界。の。実。説。如。此。々。々。と。報。知  
 し。ゆ。ち。歎。け。ば。珠。之。次。も。當。惑。の。多。と。又。さ。さ。嗟。嘆。の。堪。む。俱。し。頭。を。病。ま。さ。る。と  
 素。よ。り。その。性。老。実。さ。る。と。總。角。の。時。商。量。敵。ま。さ。よ。り。も。阿。夏。の。あ。つ。さ。う  
 の。甲。斐。さ。る。と。心。い。ゆ。く。安。ら。ぶ。と。の。通。宵。寝。られ。ぬ。隨。小。獨。孰。も。あ。つ。さ。う。盤。纏。の。さ  
 り。携。來。る。物。み。る。喪。ひ。つ。け。れ。ば。客。賃。の。債。を。の。せ。ん。の。あ。つ。さ。う。居。の。あ。つ。さ。う



ゆくゆくは去易の事。と面をせる所多し。あつ夫婦は懐と著しく  
憑まば美引て憐る。とありのせせん。生口を人のあるも知れ。と母思とつ次は日  
祥八夫婦がうち揃や。納戸もろく残窺や。そは母のふ赴はく。さの左界は実  
説を報知され。然びと竊小述て扱ひ。陶師の亡夫の親族で侍まども  
道遠ければ年あま。音耗絶て侍り。まの春猛ふ。起くとあま。つて  
まの彼人京師に在。時預ま。せ。金あれ。盤纏の多く推乃。金許侍  
下。半分の路の用心。見の膚。纏措せ。遊び耽り。何の間。失ふ。せん  
ま。あま。只陶師。心當。行篋の物を售。つ。け。ま。侍。り。彼人空く  
る。あひて。頼む樹下に。雨漏。を。何処。立ん。樂浪の。近江も。還り。が。ころ。然れど  
と。駟も。習ぬ。新水の。技を。做。ま。ま。と。人の。役。立。く。も。侍。り。初。京師。に。在。  
程糸竹の技。も。入。る。ま。せ。る。れ。ば。鄙。語。の。身。を。資。る。よ。ひ。あ。る。り。も。せん。且

より日毎。街衢。を。尋。る。人の。門。々。歌。曲。を。賣。て。親。子。の。口。を。餓。せ。と。あ。ひ。侍  
れ。客。債。の。債。の。あ。へ。れ。ど。心。多。く。取。り。願。ひ。け。り。生。賃。不。と。苗。ゆ。あ。る。  
幸ひ。あ。んと。あ。り。入。り。口。説。く。涙。を。進。ま。け。妻。の。祥。八。を。は。く。と。う。ち  
皆。て。尉。め。て。頭。を。傾。け。噫。せ。身。親。子。の。薄。命。を。今。後。如。く。あ。え。と。あ。ひ。侍。後  
ら。敬。馬。れ。痛。ま。ゆ。弥。増。り。身。が。男。子。あ。ん。ん。言。品。も。あ。け。れ。同。行。を。十  
五。足。り。弱。息。を。と。り。せん。千。の。を。言。入。過。と。ち。女。房。盛。る。地。相  
識。と。あ。げ。一。期。の。の。馴。染。を。後。小。を。本。も。せ。陶。大。人。由。縁。の。女。中。之  
其。門。謡。の。日。々。の。朽。り。心。裏。恥。く。も。あ。れ。を。人の。落魄。と。い。ふ。然。る。お  
尋。思。考。の。心。中。を。推。量。す。歎。息。の。外。必。然。と。今。ま。の。如。く。阿。客。の。六  
措。が。身。の。且。あ。身。の。隨。意。挿。了。あ。も。弱。息。の。昼。も。留。置。て。或。は。水。汲  
と。走。使。ひ。の。小。要。を。達。さ。る。と。彼。子。の。客。債。の。取。り。と。い。ふ。又。女。房。も。共



もさへん。家々の客店をたもて哀れ客を由りての客も傳金縁あれを  
侶の嗟嘆と。家々の客店をたもて哀れ客を由りての客も傳金縁あれを  
損ともせぬ。今ゆきもたもて哀れ客を由りての客も傳金縁あれを  
家中給事まゝあせむる女見の擗き時ひきたる。松棹をたもて哀れ客を由りての客も傳金縁あれを  
ねと貸まゝあせむる女見の擗き時ひきたる。松棹をたもて哀れ客を由りての客も傳金縁あれを  
又袖濡らして阿夏いそぐ推辞ひ死且感且且感。珠之双をの口管憑む親  
心誰の心とあふれ。多も不樂。朝儀の猶前取る身不わねも。祥八丈婦を  
窮鳥の懐入る心地と。猶も姑く慰めり。却説阿夏その次の日より。彼之慈借  
取く笠深くまつたつるも。鶴峰の城下と。其処ともうら。門謡今様早歌説  
經の節も章句も都備。声の涙小隱口。そのくも朽をたもて哀れ客を由りての客も傳金縁あれを  
日と歴る隨小稍熟。西の都の幾町と。送る唄ひ遠れも。一声價一錢の。内なれ  
藻塩草搔集れも。一日は錢一緡の。易く。況雨の日雪の朝。一枕の糧も空す

初京師不在。比物足らぬ。折々木偶成。小夏をたもて哀れ客を由りての客も傳金縁あれを  
く。たる。の。も。あ。は。し。ひ。と。彼。子。が。あ。の。世。在。る。と。言。ふ。小。告。死。の。る。心。で。泣。け。目。稀  
劣。で。る。男。見。な。り。母。の。為。あ。る。と。収。め。の。ま。と。吐。く。の。人。小。告。死。の。る。心。で。泣。け。目。稀  
る。母。の。珠。之。双。の。宿。の。庵。福。小。役。使。れ。て。目。目。技。お。暇。も。と。初。冬。に。り。霜。柱  
た。朝。の。も。と。起。さ。れ。て。水。と。汲。み。入。れ。北。風。寒。死。父。の。氷。と。推。さ。る。浴。桶。と。焚。く。艱。難。の  
づ。も。あ。は。し。ひ。と。怨。む。親。も。恨。む。阿。夏。が。宿。小。の。折。の。身。の。真。愛。交。と。數。立。て  
吾。侪。が。近。江。小。在。り。日。の。習。讀。書。と。勢。お。せ。の。之。度。の。膳。も。人。小。齊。眉。を。飽  
ま。た。た。暖。衣。を。心。の。あ。る。雲。も。る。樂。か。り。ける。の。ま。り。小。不。覺。と。修。す。身。身。れ  
浅。慮。生。る。欲。死。せ。る。欲。定。る。と。周。防。の。叔。父。公。小。あ。せ。ん。と。水。行。艱。苦。の。旅。宿。と  
の。遙。々。と。あ。る。甲。斐。も。る。叔。父。公。の。道。走。り。て。辛。死。目。小。あ。朝。る。夕。の。つ。く。と  
命。も。結。が。こ。る。赤。目。の。口。用。言。似。死。這。戦。と。え。の。ま。親。子。乞。食。も。る。果。は。か。ん



星繁の  
備運之  
俗小ま  
すあせの  
よりわと  
あまの  
の備運  
よま吉  
あまの  
あまの

身の本意欲樂に飲と飽まで親を窘むれば阿夏の堪む声ゆり立て又も不  
孝の吉も凶も皆是時の星繁であるの今ゆふ不足の福富殿の現  
了。五両の金とあはれは使捨られずやあをの地を夜逃ふとも近江へ還路  
費のあらんを已が墮るる支多うく親に乞食さうらう庖働にまればとあをの地  
せざらんやと罵らう又罵らう親子の角口仇多る血で洗ふ煩惱の瞋まの敵に照  
されて黒く恥も赤う顔の楓葉も散るまふ肩に魂人の僉傍痛く思  
けり。あわれも親子の恩愛阿夏の諍ひ肩ても言と立息を表裏あをの思と  
憎いとあわれも折る柞樹や殿寒の詰目も亦生活あまけり不題鶴峯は城を  
距る東の二十町許の柳町と喚做したる最熱開の地方あは一條の川ありと  
渡せり梁を垂柳橋とあり橋の盡く年ゆりたる柳樹あふるとあをの地の夏と上目と  
あは船よりの歩よりの群の人の遊ぶと壁京師の四條に似たり然れば茶店もの

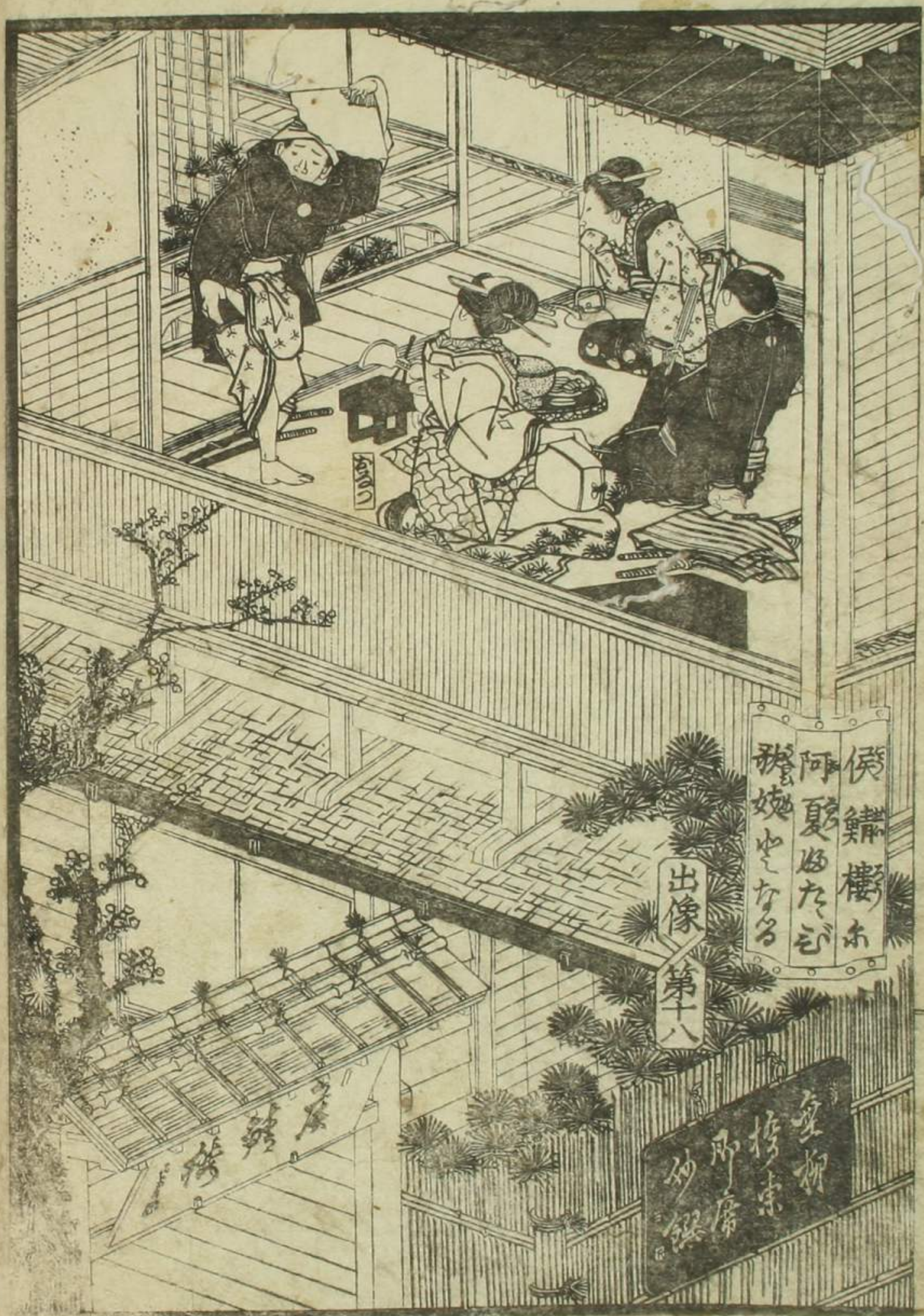
先飲食と宗とまざる商買の家勘うねる冬あまの生業と轉と叔實は  
のまふ垂柳橋の邊の候鯖樓と酒樓の三年中客の絶る冬と賞  
雪の船と寄せ春の觀梅の轎子と這廬前より即席の酒酌のあは穰  
中を盡くとも恨とせり風流士との同話休題阿夏の件の候鯖樓の熱雨  
を猶知りて日毎あまの門の立く小曲と如く歌ひつけ酔ふ狂樓と散動  
客の懐帑の錢を包と投するも稀あはけり如之而日来を程有一日這  
酒樓の客の小絶一折とも知らず阿夏の立けるあをの竊の呼入れ卒介あは  
とんが你の世の凋落である生活であるあをの地の人のあをの地  
侶を喪ひせまざるの技あはあま何処を宿あはあま阿夏の罵あは  
あは憑くも回せあは情の程推量られくあはあま京師のあは  
身の幸あは近江あは山里あは親住く夏歲月を送るあは其処に又住むあはあまの地



所親心當の尚総用る見を推して多々來ぬ。甲斐もる。親族の地はゆる。
 刺近曾又まると。風の便りもなき。程の盤纏も。宿の西の。
 けれど見を宿の預措て。淡く生活。一目と送の。宿の西の。
 博勞町る粟津屋と。隠れあふ。恥し。顔の醫者の袖。
 涙も篋でけり。あつれをうち。あつれをうち。違ひ。
 よの舟の楫を絶。旅宿の艱難。おらん。繚致とのひ。歌曲とのひ。門諺。
 惜う。あつれ。妙音。妙音。以。あつれ。就。一條の商量。
 日毎。客の。冬。あつれ。歌。又。折他町へ。
 らして。呼。煩。火急。西。和。女。郎。家。宿。
 需。下。霜。枯。門。諺。の。挿。了。了。便。便。と。彼。粟。津。屋。の。祥。
 八。宮。嶋。講。中。る。庵。素。素。相。識。る。這。商。量。を。

宿の緯の。又。來。疑。後。の。旅。人。
 紛れる。一筆。示。あつれ。後。阿。夏。
 有。あつれ。計。い。あつれ。祥。八。夫。婦。小。告。
 妻。の。夏。と。呼。れ。あつれ。目。の。あつれ。願。い。
 と。口。誼。を。述。く。遠。く。粟。津。屋。の。祥。八。夫。婦。小。如。此。
 あつれ。緯。の。趣。を。告。ぐ。祥。八。も。女。房。も。共。侶。
 あつれ。候。鯖。樓。の。講。敷。計。心。さ。由。も。克。知。入。小。善。
 る。と。又。あつれ。簡。を。遺。す。あつれ。人。を。跟。く。
 せん。と。他。克。る。あつれ。首。尾。を。熱。阿。夏。
 件。の。よ。と。説。示。祥。八。夫。婦。小。集。る。云。と。憑。
 阿。夏。の。結。髪。化粧。ま。候。鯖。樓。小。赴。姑。く。あ。寓。居。客。の。招。





侯爵様  
阿夏様  
御座り  
御座り

出像  
第十八

御座り  
御座り  
御座り

美川金一車



俟程まちど未まあつたけりしとて妻つまも情なさけあつたけりし客きやくも薄うすく生活しやうかも暇ひま  
 あつたけりしとて異うせ二に抄しやうを拂はらへ雁陣かりん長列ながりで青女あいなの橋はしを粧まり鶴つる鶴つる  
 氷こほりを洗あらふ冬ふゆの日子ひのちのち果敢はたらくもあはれ交まじりけりし程ほどの  
 今いま茲こゝも暮くれる春はる正月むつねの中なか院いん有あり一日いちにちうち陣つれ立たたふ両りやう箇かんの武士ぶし各おの々おの一  
 箇いの後のち者ものをぬぐ何なんれゆれとあつたけりし候こう結むす樓ろうの立たちて昼飯ひるめしを  
 たる酒さけを喫くむあつたけりし歌うた妓ぎありと皆みなく躬みづかく阿あ夏なを呼よび登のぼり詞ことばのせもあつた  
 酌しやくを執とりて盃さかずきを飛とべ笑わらひ樂たのむ程ほどの春はるの日子ひのちのち尚なほ短みづかく下した晡ひるのちのち  
 件くだの武士ぶしの酒席さかの價あり取とりて遠とほくゆり去さるとあつたけりし中なかの  
 一い箇いの武士ぶし年とし才さいの三十さんじゅうあつたけりし又また立た飯めしりて雲くも時ときのちのち耳みみはけり  
 畢ひら竟まはつたけりし武士ぶしあり對むかひにさるるを相あ譚わひけんその次つぎの卷まきの解とけ分わるる聴きこひ  
 近世説美少年録第二輯卷之二終 村田

悪者悪也善者  
 善者善也千古不變  
 可那不變



